

優秀賞

友達作りは

イギリスウエールズ補習授業校六年 小林 由佳理

たくさん友達を作れると思っていたのに。一ヶ月たっても友達なんて一人も作れない。

それは私にとって二度目の転校だった。一度目は日本をはなれ、イギリスに住み始めた時。今回はそのイギリスの公立校から、私立校への転校である。

学校の休み時間。私はいつも一人だった。同じ学年のグループを見つけると、私は近寄って、「遊んでいい?」

と聞く。すると答えはどの子も「だめ」とか、「他の子と遊べば?」だ。私は校庭にあるベンチに座り、泣きそうなのをぐっとがまんした。泣いて、みんなに理由を聞かれるのは、泣くよりもみじめに思えた。転校生なのだから、すぐに友達ができるわけがないのだ。母にこの話をすると、

「『遊んでいい?』ではなく『遊ぼう』と言ってみな。」

と言った。

私は次の日からそのことを何度も試してみた。ところが、クラスメイトからの答えは同じだった。私は一人でいることに疲れてしまった。

二ヶ月たってもまだ友達ができない。転校しなければよかった。ふと目の前を見ると、同じ学年の子達が楽しそうにおしゃべりをしている。あの中の一人に私はどうしてなれないの?」

ある日、学校から帰り家に入ったとたん、ぼろぼろ涙が出てきた。母が私を無言でだきしめた。母は分かっていたのだ。私がいつも一人ぼっちでいることを。母は担任の先生に手紙を書いた。放課後、先生と母、私の三人で秘密の会議が行われた。先生は、

「ゆかりは静かだけど、いつもニコニコしているので気が付かなかったよ。」

と言った。その一方で母は、夜の保護者会でたままとなりに座ったお母さんに、私の様子をきか

れ、友達ができずに泣いたことを話した。それはルースのお母さんだった。

ある日、休み時間に一人でいると、リディアが近寄ってきた。

「私たちと友達になろう。」

ルースがお母さんから話を聞いて、リディアにその話をしたらしい。うれしくて、気持ちがすうっと軽くなった。

二ヶ月ほどして、リディアが言った。

「ベストフレンドになろう。」

思わず私は「本当?」と日本語で言ってしまった。やがて私には四人の友達ができた。

転校して二つ分かったことがある。それは、一人目の友達を作ることとはとても難しいということ。しかし、一人目の友達を作ってしまうえば、あとはどんどん友達ができること。私達はけんかもするけど、けんかは友達がいるからこそできること。それさえも今の私には喜びだ。

この先、休み時間に一人でいる子を見つけたら、私は必ず声をかける。その子がどんなにさみしいか、声をかけられたらどんなにうれしいか、私は痛いほど分かっているから。

